

岡山のとしょかん

岡山県図書館協会報
(第 134 号)

優秀賞とオーディエンス賞を受賞しました！ —津山市立図書館—

津山市立図書館は「Library of the Year 2022」において優秀賞及びオーディエンス賞を受賞しました。

「Library of the Year」(LoY)は、これからの図書館のあり方を示唆するような先進的な活動を行っている機関に対して、NPO 法人知的資源イニシアティブ(IRI)が毎年授与する賞です。岡山県内では 2017 年に瀬戸内市民図書館が大賞とオーディエンス賞を受賞しています。

令和 4 年 11 月 30 日(水)に最終選考会が開催され、4 機関の中から大賞とオーディエンス賞が決定しました。オーディエンス賞は一般のオンライン投票により最多得票を得ての受賞です。日頃から津山市立図書館をご利用いただいている皆様、投票いただいた皆様に心より感謝しています。大賞は、ぎふメディアコスモスが受賞しています。



[6 高校・大学・高専市内配置図]

今回の受賞理由となった三館連携は、平成 20 年に美作大学図書館、津山工業高等専門学校図書館及び当館の三館、その後市内 6 つの高校と相互協力協定を締結したことが始まりです。「私

立」「国立」「公立」という三つの異なる設置母体を越えた各自の経営資源の相互利用を「津山モデル」として高く評価していただきました。

三館連携の実際のサービスですが、市内にある大学・高専・6 つの高校はいずれも図書館からは 4 km 圏内にあり、非常に近い位置に密集しています。図書館職員は月に 1 回の休館日を除いて月曜から金曜まで毎日配送を行っています。

配送は各校のリクエストに応じて最適なルートで届けています。午前中にリクエストがあれば午後 3 時までには本を届けることができます。津山高専図書館により管理・運用されているメーリングリストがそれを可能にしています。

また各校の文化祭に自動車文庫が出張したり、大学・高専の教授陣による講演会を開催したりするなど連携は広がりを見せています。



[美作大学の文化祭に出張したぶっくまる]

自治体が運営する図書館として、市内に分散している学習資源を最適化・最大化し、その循環の仕組みを作り住民の暮らしの質を上げていくことは私たちの使命だと思っています。

今回の受賞を励みに、これからも社会の変化に対応しながら、地域を支える知の拠点として職員一同活動していきたいと思ひます。

(津山市立図書館 菊入典子)

県内図書館共同企画

「秋の図書館福袋 ブクブク本袋」

県内図書館共同企画 「秋の図書館福袋 ブクブク本袋」

図書館福袋は、図書館職員が選んだ本を、中身が見えない状態のまま貸し出し、何が入っているか分からない意外性を楽しみながら本と出会うことができる企画です。岡山県立図書館では、令和2年度から実施しています。

当館では、毎回開館を待つ列ができるほどご好評をいただいておりますが、遠方のため県立図書館まで足を運ぶことが難しく、近くの図書館でも開催してほしいとのお声をいただいております。そこで、県内の図書館に呼びかけ、初めて県内共同企画という形で、21館の図書館と同時期に実施することとなりました。図書館福袋を独自に行っていた館、初めて行う館それぞれでしたが、当館のノウハウをお伝えできるよう、マニュアルを作成し、負担軽減のためポスターデザインなどのテンプレートを提供しました。各館で工夫していただき、多くの利用者楽しんでいただける機会になったと思います。新聞やテレビなどのメディアで取り上げられたこともあり、参加館を対象としたアンケートでは広報について高く評価していただきました。今回は参加を見送られた館も機会があればぜひご参加いただき、県内図書館が一体となって、住民の図書館の利用が促進するよう盛り上げていきたいと思っております。



[奈義町立図書館での開催の様子]

(岡山県立図書館 小櫻美樹)

新たな出会いを！～小さな一冊が大きな満足へ～



「楽しみにしとったんよ」「自分で選ぶといつも同じような本しか手に取らんから」。新たな本との出会いを待つ皆さんの期待が集まる「本の福袋」。秋の読書週間に、県内図書館で行う取り組み「ブクブク本袋」に参加しました。コピー用紙の包み紙を再利用・成形して袋を作ります。テーマを表面に貼付し、2冊のおすすめ本を入れ、封をしたら出来上がりです。一斉イベントという話題性もあり、新聞やチラシで開催を知った利用者が、開館を待って来館されました。

本の福袋は毎年行っていますが、その都度迷うのがテーマの付け方です。具体的か抽象的か、どちらが手に取り易いのだろう。対象者を想定してメッセージにしたり、確実性を求めてキーワードにしたり、ユーモアと意外性を狙い漢字一字で想像してもらったり…と、あの手この手で攻めてみるのです。

「面白かったわあ」という声の一つでも聞かれたら大成功。小さなきっかけで手にする一冊から期待が生まれ、喜びを感じ、一人ひとりの満足へ繋がることを願って日々の業務にあたっています。

(吉備中央町図書館 山田敬子)



[声をかけやすいカウンター前に]

**With コロナ時代と図書館
～浅口市立図書館の取り組み～**

令和2年からのコロナ禍では、図書館も休館したり、一部のサービスの制限をしたり、いつでも気軽に利用できる場所ではなくなりました。現在、with コロナの社会に移ってきているようですが、講演会・講座・おはなし会などの人が集まる行事をコロナ以前のような方法で行うことが難しい状況です。

浅口市立図書館では、感染防止対策のひとつとして利用者が自由に使用できる書籍除菌機と検温器を導入しました。また、講演会や講座などでは使用する部屋の広さに合わせて予約を取り、密にならないようにしています。昨年、鴨方図書館では、おはなしの部屋の横壁を改修し、換気をスムーズに行えるようにしました。おはなし会の際は参加者同士の距離を保って座れるようにイスを置いています。

このように制限がある中でのですが、図書館は、利用者にとっての本との出会いの場になるように、工夫することが求められていると感じます。感染防止の対策を取りながら、図書館の役割を果たすために何をどのようにするべきかを模索しています。
(浅口市立鴨方図書館 弓削遥香)



〔書籍除菌機と使い方〕



〔乳児絵本コーナー〕

With コロナ時代の図書館

**コロナ禍における学外者への対応について
—くらしき作陽大学・作陽短期大学附属図書館—**



〔2階閲覧室設置パネル〕 〔遵守事項掲示〕

くらしき作陽大学・作陽短期大学附属図書館では、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、令和2年度から学外者の図書館利用を停止していましたが、本学には音楽学部があることから音楽関係の資料(音楽書・楽譜・クラシック音楽視聴覚資料・音楽系雑誌等)が充実しており、利用停止期間中も楽譜の閲覧や貸出に関する問い合わせや要望を多くいただいたことから、令和4年4月に学外者の利用を再開しました。再開するにあたり、新型コロナウイルス感染症予防対策としてアルコール消毒液やアクリルパネル、カウンターでのビニールカーテンの補強設置を行いました。また図書館内でのマスク着用や大声での私語禁止、ソーシャルディスタンス確保等の基本的遵守事項(遵守なき場合は利用停止)を館内各所に掲示し、本学図書館ホームページにも掲載しました。

その他、返却資料の消毒作業に加え、個人閲覧室等の館内施設は使用時間と人数に制限を設けた上で、学内者を優先して提供し、使用前の体調確認や使用後の換気・消毒等も基本対策として日々行っています。コロナ禍でも、状況に応じて対策を講じることで、学内者・学外者にとって、安全に安心して利用できる資料や場を提供できたらと思っています。

(くらしき作陽大学・作陽短期大学附属図書館 村上波)

玉野市立図書館における SNS 発信

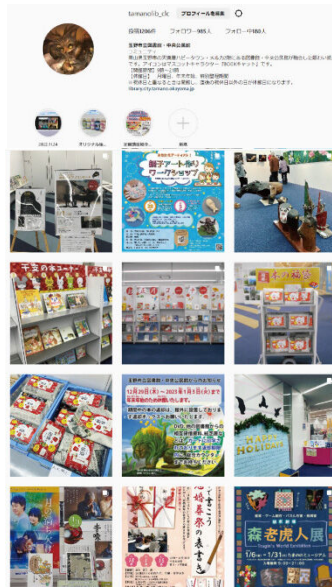
玉野市立図書館は2017年4月、全国的にも珍しい公民館との『融合施設』として移転リニューアル開館し6年目を迎えました。図書館は公民館と同じく“生涯に渡って利用できる学習の場”です。SNSはティーンズ世代や社会人など、普段あまり利用されない傾向にある皆様にも図書館の魅力・利用法を発信する有効な手段と考え、積極的な活用に取り組んでいます。

■ SNS 運用にあたっての工夫

開館5ヶ月後の2017年9月、Instagramが流行し始めたタイミングでフェイスブックと共に開設しました。“広報チーム”スタッフ数名を中心に写真・記事を用意し、高い頻度でスムーズに更新できるよう工夫しています。現在の投稿数はおおよそ1,200件で、2日に1回以上の更新頻度となります。

SNSでは最初の画像がとても大切で、「映え」を意識し、詳細をみてもらえるような写真をサムネイル画像にしています。

また、ハッシュタグもできるだけ細かく付けるように努力しており、図書館の特集コーナーには『#本のある暮らし』をなるべく付けるようにしています。特にInstagramは海外の方が多く使用しているため、英単語のハッシュタグもつけるようにしています。併せて、館内・ホームページ・図書館だより等にSNSの二次元バーコードを掲載し、簡単に検索できるように工夫しています。



[当館公式Instagram]



■ SNS の活用事例

SNSに投稿できる話題が豊富であるのが複合施設の利点です。SNSに全てのイベント、特設コーナーを投稿することにより「当館の魅力を知ってもらおう」ことにつながっています。SNSは幅広い世代、特に20~30代の方々が見てくださっており、SNSでイベントを知って申し込んだという方も多くいらっしゃいます。

また、最新情報をチェックして下さったメディア関係者の方々による掲載の頻度が上がり、イベントの活性化にも繋がっています。他にも、臨時休館や開館時間の変更等のご案内も投稿し、多くの方の周知に役立っていると考えています。

■ SNS 活用の新たな取り組み

2022年8月にはツイッターを開設した他、新たな取り組みとして『インスタでつながる公民館』企画に参加しています。Instagramを運用している公民館同士の声掛けを機に、遠く離れた公民館をオンラインでつな



[インスタでつながる公民館]

ぎ、職員の情報交換や地域の人と一緒に「ご当地健康体操」を紹介しあう等のイベントを開催しています。こうした取り組みを通じて、現在Instagramでは900名を超える皆様にフォローをいただいています。

■ その他 SNS 活用の効果

SNS活用を通じて、スタッフの広報に対する意識やスキルが格段に向上した他、投稿を遡ることで簡単に過去の出来事や事業等を把握できるようになりました。

今後も「綺麗な施設をもっと見てもらいたい。公民館の魅力、図書館の魅力を知ってもらいたい」を目標に、玉野市の方はもちろん全国の人に向けて発信していくよう心掛けていきます。

(玉野市立図書館 相澤千桂・正子敦司)

瀬戸内市立図書館における地域との連携

瀬戸内市立図書館では、さまざまな団体と連携して事業を進めていますが、ここでは、主な連携団体と活動を紹介します。

■読書ボランティアと「パトリアねっとわーく」

瀬戸内市内では現在、読書ボランティアグループとして6団体約50名が活動しています。瀬戸内市民図書館（以下「市民図書館」）、牛窓図書館、長船図書館の3館では、これらの団体と連携し、毎月「おはなし会」を開催しています。

また、子どもたちに読書の楽しさを知ってもらう活動をする目的で、2011年、読書ボランティアの関係者などが集まり、「パトリアねっとわーく」が設立されました。

パトリアねっとわーくは、市民図書館の建設準備期間にオリジナルのステッカーを制作・販売し、売り上げを図書館建設に役立ててほしいとして、市に寄附するという活動を展開しました。市民図書館開館後は、イベント開催などで図書館との連携を続けています。

■瀬戸内市アマチュア人形劇団協議会

瀬戸内市では、市内のアマチュア人形劇団が集まり、協議会をつくっています。市民図書館には、人形劇が上演できる舞台が常設されており、月1回のペースでアマチュア劇団による人形劇定期公演が行われています。人形劇上演にかかる準備や当日の運営などは基本的に劇団が担い、会場の管理等で図書館職員と連携しています。

■図書館友の会

市民図書館開館から約半年後の2017年1月、図書館の未来を考える市民ワークショップ「としょかん未来ミーティング」に参加していた人たちが中心となって、瀬戸内市立図書館友の会「せとうち・もみわフレンズ」（以下「もみわフレンズ」）が設立されました。会員は現在約80名となっています。

もみわフレンズは、会費による自主財源で運

営しており、図書館をサポートするだけでなく、独自に企画した事業を展開しています。総会を年1回開催して代表や役員を選出し、月1回の役員による運営委員会で活動内容を決めています。運営委員会には、図書館長が同席し、図書館主催事業との調整を図っています。

もみわフレンズは、市民図書館の開館記念月に開催している「もみわ祭」などの行事を、図書館と共催しています。コロナ禍になってからは行事の開催にも対策が必要となっていますが、2022年4月には、市民図書館前の芝生広場（「オリーブの庭」）で、ダンボールを使って子どもたちに楽しんでもらう「ダンボールアトラクション」を開催しました（写真）。

また、「瀬戸内市協働提案事業補助金」を活用して、図書館との協働事業を実施しています。令和3年度は詩とデザインをテーマとして事業を進め、公募による市民の詩集とデザイン画集を作成しました。



【「ダンボールアトラクション」の様子】

■地域連携

ほかにも図書館では、瀬戸内市地域自立支援協議会、瀬戸内市社会福祉協議会、瀬戸内市商工会青年部などとも連携した事業を行っています。図書館の基本理念「もちより・みつけ・わけあう広場」を具現化するため、これからも、できるだけ多様な市民や団体と連携し、さまざまな分野の、多様な事業を展開していきたいと考えています。

（瀬戸内市立図書館 村上岳）

赤磐市立図書館のレファレンス

「手ぶらでは帰しません。」をモットーに赤磐市立図書館では利用者の希望にお応えしています。

中央図書館には、レファレンス専用のカウンターを設けており、“草の根をわけても”の精神で、利用者の課題の解決に取り組んでいます。

カウンターで話を聞きながら資料を探しているのですが、検索に時間をいただくことも多く、また、残念ながら希望される資料を準備することができないこともあります。



[中央図書館 レファレンスカウンター]

■ 郷土の研究

県外の方から、「赤磐市内にある『石上布都魂神社 (いそのかみふつみたまじんじゃ)』について調べているので協力してほしい。」とおたずねがありました。

この方は、以前赤磐市に住んでおられ、歴史の勉強会に参加したことがきっかけで、郷土の神社についても興味を持たれたとのこと。

吉井図書館や山陽郷土資料館などにも問い合わせをし、神社に関する資料のコピーや参考文献リストを送付するとともに、調査に役立ちそうな機関の窓口を紹介しました。

その後も、同じ方から何度か赤磐市に関する問い合わせをいただき、対応しました。図書館職員として赤磐市内の「郷土」の内容について改めて知ることができたレファレンスでした。

■ きっかけは1冊の絵本

数年前に、年配の男性から、「夏休みで帰省する孫のために絵本を借りたいが、どれを選んでよいか迷っている」とたずねられました。その時は、お孫さんの興味があるジャンルやお好きな内容についてお話を聞きながら、おすすめできそうな絵本を数冊選びお持ち帰りいただきました。

その利用者は、これ以降、夏休みに入る前に来館されるようになり、帰省されるお孫さんの絵本を毎年一緒に選ぶようになりました。

その後、コロナ禍でその利用者の姿をお見かけすることもなかったのですが、先日久しぶりに来館され「おかげで、うちの孫は本好きになったよ。ありがとう。」と声をかけてくれました。

絵本を選ぶということで、子どもに絵本の楽しさやすばらしさを伝えることができ、また絵本を通じて、利用者と心温まる交流ができたように感じました。



[児童コーナー 絵本書架]

「レファレンス」は自らの勉強の機会でもあり、利用者が職員を成長させてくれているようにも感じます。

これからも、利用者一人一人の課題が解決できるよう、丁寧な対応を心がけていきます。

(赤磐市立中央図書館 金谷紀子)

令和4年度岡山県図書館協会 研修参加助成事業報告書

研修名：第108回全国図書館大会

群馬大会（オンライン大会）

期 日：10月6日（木）～7日（金）

記念講演「トークセッション 若手作家が語る 図書館と創作 阿部智里（小説家）×如月かず さ（児童文学作家）」金原瑞人氏（法政大学教授）

金原瑞人氏をコーディネーターとして、阿部智里氏、如月かずさ氏が、図書館と創作について語るトークセッションが行われました。

阿部氏、如月氏とも、幼少期から本、そして図書館に親しみ、特に中学生の頃には学校・公共両図書館を利用し、精力的に読書をされていたそうです。また、両氏は、執筆にあたり、図書館資料を活用されていたとのことでした。図書館が作品執筆の一助となっていることを知り、司書として嬉しく思いました。

阿部氏は「本を読む喜びを知らない人に、読書の機会を無償で提供するという意味で、本にかかわる身として図書館の存在を大切にしていきたい。」金原氏も、「図書館の第一の仕事は本好きな人を増やすこと。」如月氏は、「特に児童書の場合は、図書館は出会いの場としての役割が非常に大きい。」と、図書館の意義について語られました。この期待に応えられるような図書館運営を、今後も続けていきたいと感じました。

第12分科会 出版流通 北米の公共図書館におけるマンガとラノベの所蔵

基調報告として、デジタルハリウッド大学特任教授・椎名ゆかり氏から、「北米における日本産マンガの受容について」説明がなされました。

2000年代にアメリカで始まった「TOKYOPOP 100% AUTHENTIC MANGA」キャンペーンでは、マンガの判型を揃え、モール書店の顧客層であ

る少女・若い女性が好みそうな日本産マンガ作品を選定するなどの工夫がされました。併せて、従来のcomicsとは異なる、“MANGA”を新商品の、単行本としての出版形態にし、MANGAの特徴も含めた商品として売り出しました。このことにより、MANGAとは、読み捨てられる雑誌ではなく、1冊の書籍として認識されるようになるなど変化が起こり、アメリカの図書館での所蔵数増加にも繋がったそうです。

事例報告では、J コミックテラス・佐藤美佳氏から、「マンガ図書館Zについて」の説明がありました。日本産マンガを読む際に、違法サイトである「海賊版」サイトを使用する海外の人がいますが、漫画家の収益に繋がらないという問題が生じたため、マンガ図書館Zの開設に至ったとのことでした。佐藤氏は、マンガ図書館Zの特徴として、往年の懐かしいマンガや、絶版などで入手が難しいものを、出版社の協力を得て合法化していることを話されました。

続いて、青山学院大学コミュニティ人間科学部教授・大谷康晴氏から、「公共図書館におけるラノベ・マンガ所蔵とその論理」について報告がありました。大谷氏が行った、公共図書館におけるマンガの所蔵状況調査によると、エッセイマンガの所蔵が最も多く、これは、エッセイマンガが書籍ルートで流通していること、かつ週刊全点案内カタログに掲載されていることが理由として考えられるとのことでした。

また、大谷氏は、公共図書館は、出版状況や読者層とかけ離れた選書をしているのではないかと、ラノベ・マンガの選書方法を検討する必要があるのではないかと、との意見を述べられました。

瀬戸内市民図書館でもラノベ・マンガの選書は、とても難しく感じています。担当者が所蔵したいと思うタイトルやリクエストを受けるタイトルがありますが、書架スペースには限りがあります。長く連載が続くシリーズが多く、ま

た、中高生世代のブームの移り変わりの早さも悩みの種です。大谷氏の語られた、「ラノベ・マンガの選書システムの構築が必要」との言葉にうなずきつつ、どうすればよいのか答えはまだ出ていません。ただ、利用者の需要に沿った選書になるよう、日々心掛けていきたいと思えます。

(瀬戸内市民図書館 原田佳奈)

第 96 回教養講座に参加して

「県立長野図書館におけるデジタルシフトの取組み—Wikipedia LIB や電子図書館の事例を中心に—

期日：令和 4 年 11 月 25 日（金）参加者：33 名
講師：小澤 多美子氏（長野県教育委員会事務局文化財・生涯学習課 主査）

小澤先生のご講演では、はじめに、県立長野図書館では「共知、共創の広場」を目指して、人々の知る自由を保障し、「個人と社会の幸福を追求する」ために図書館サービスを行っていることをご紹介いただきました。そして、今後デジタル社会が進む中においてデジタルデバイドの解消とデジタルリテラシーの向上が図書館の役割として必要であることを述べられました。

県立長野図書館におけるデジタルシフトの取組として、図書館員が Wikipedia に県内図書館に関する記事を書くことで「情報を創る」体験をする「Wikipedia LIB@信州」や、スマホやタブレットをかざすと百科事典に紐付いた様々な情報を調べることができる「ほぼ日のアースボール」の閲覧室への設置、そして展示資料の関連情報を閲覧できるようにするための iPad の設置などをご紹介いただきました。また、令和



[ほぼ日のアースボール]

4 年 8 月から開始された電子図書館サービス「デジタルとしょ信州」は、市町村図書館と県立図書館が協働で運営しており、全ての市町村図書館で電子書籍が利用できるようになっています。

小澤先生の「図書館を主語とした「どうあるべきか」ではなく、社会の一つの機能としての図書館の役割を考えていきたい」という言葉は、デジタル社会の進展の中で図書館に求められているものを再考する契機となりました。

(岡山県立図書館 菅沼淳子)

事務局からのお知らせ

■令和 4 年度セミナー・教養講座の資料の提供

今年度開催されました、県図協セミナー（第 1～4 回）、第 96 回県図協教養講座の資料をご提供しています。研修へご参加いただけなかった方へのご提供も可能ですので、必要な方は事務局までご連絡ください。

■異動調査

本年度も例年どおり異動調査を行います。所属・住所等の移動があった方は事務局までご連絡ください。また、入会・退会をご希望の方も併せてお知らせください。

■令和 5 年度研究奨励金の募集

現在、令和 5 年度の研究奨励金の交付申請を募集しています。図書館に関する研究であれば、広く交付対象となります。皆様のご応募をお待ちしております。

申請期限：令和 5 年 3 月 26 日（日）

（詳しくは岡山県図書館協会ホームページ掲載の要項をご覧ください。）

令和 4 年 3 月 1 日発行

〒700-0823 岡山市北区丸の内 2-6-30

岡山県立図書館 図書館振興課内

岡山県図書館協会 会長 中本 正行

TEL：086-224-1269